【参考】 『寛永諸家系図伝』: 江戸時代の寛永年間（1624～44）に編纂された大名と旗本の系図集。寛永18年（1641）に着手し20年（1643）に完成した。
諸家から提出させた家譜を資料として編集を進めた。編集には、林羅山を中心に数十名の学者や僧侶が従事した。

この家系図を見ると、荒木村直（又兵衛）は、荒木村次の嫡男であり、村重の孫となっている。

☆（荒木）村直: 注記に、 又兵衛　母は烏帽子形の城主碓井因幡守女

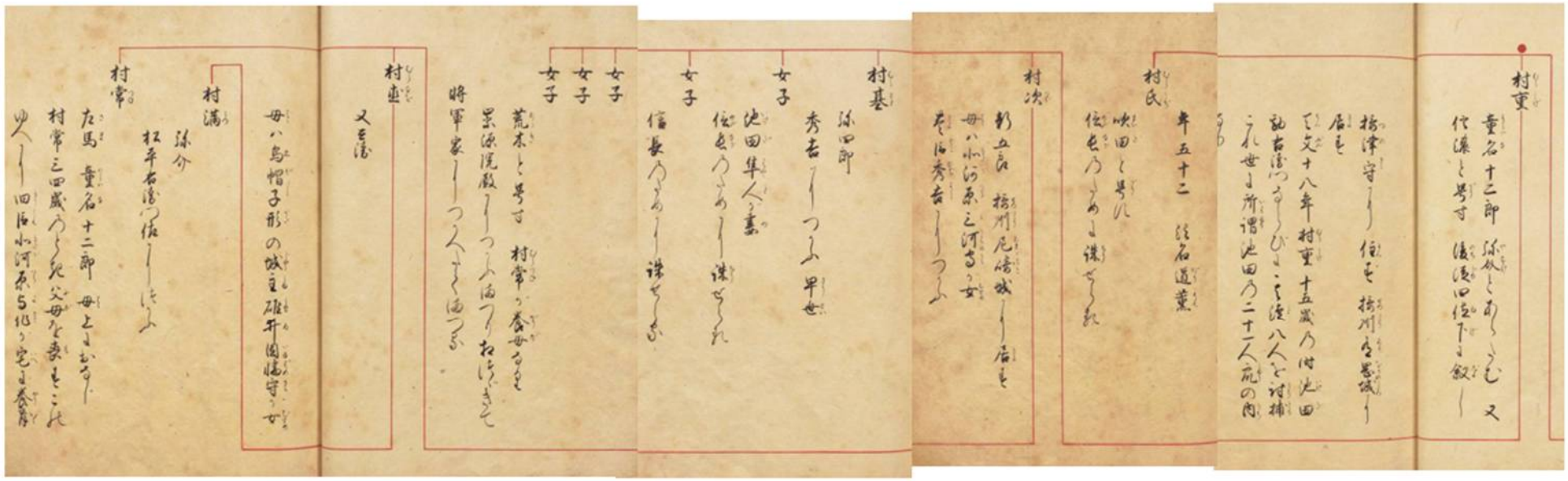
☆（荒木）村常: 注記に、 左馬　童名十二郎
「島原の乱」」において、島津氏の下に入り戦功を挙げ、
徳川直参となり寛永20年に幕府の指示により
この家系図を提出している。（右図参照　荒木家系図の最終ページのもの）

★岩佐又兵衛:　　天正6年（1578）～ 慶安3年（1650） 諱は勝以（かつもち）。

★岩佐源兵衛勝重: 慶長18年（1613）?～寛文13年（1673） 岩佐又兵衛の嫡男。

＊下図は、『寛永諸家系図伝』から各人の武士としての活動・武功部分を除いて繋いだもの。
系図の添え文は、武士中心のため、武家を外れた者や女子については詳細な記述はない。

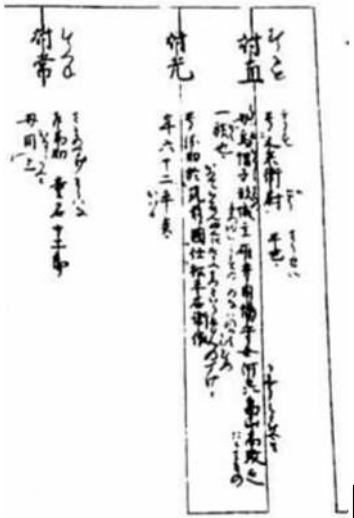
【荒木氏の略暦】
- 1579 年　有岡城落城
- 1583 年　村重堺に復帰
- 1586 年　村重死去
- 1599 年　村次死去？（38 歳）
- 1634 年　村常江戸に出府
- 1637 年　島原の乱（～38 年）
  荒木村常参戦
- 村常は荒木局に連座して配流



【岩佐又兵衛の履歴】(岩佐家譜による)

年代	事柄	情報元
天正6年(1578)	誕生	
7年(1579)	有岡城落城。 乳母に抱かれて石山本願寺に逃れる。 (2歳)	
	京都の油小路に住む。	『廻国道中記』
	織田信雄に仕える。 土佐光信に師事	
天正15年(1587)	北野大茶会を目撃の記述 (10歳)	『廻国道中記』
	国宝「洛中洛外図屏風図」 京都在住中**30歳代**の作品?	
元和2年(1616)	福井北ノ庄に移住 (39歳)	〃
	狩野派、土佐派など各派の手法を学ぶ。	『岩佐家譜』
寛永14年(1637)	3代将軍家光の命で江戸に出府 (60歳)	同上
	「三十六歌仙扁額」を制作(3年で完成)	同上
慶安3年(1650)	江戸にて死去 (73歳)	

福岡荒木家系図



村次

【上記の参考資料】 「事柄」欄の年齢は天正7年の時に2歳と仮定した場合。

・『福井県史』通史編3

・『廻国道中記』 岩佐又兵衛 (岩佐又兵衛が寛永14年(1637)に福井から江戸に出向く時の道中記)

・『岩佐又兵衛と近世風俗画に関する研究』 畠山浩一 2010

・『洛中洛外図屏風図』には、大坂の陣で破却された「豊国常舞台」が描かれている。= 1615年以前

【荒木家及び岩佐家の系譜に関係する史料】 ＊網掛けの行は岩佐又兵衛死去以前に制作されたもの。

史料名	完成時期	作成者 (所蔵)	「又兵衛」の続柄
『廻国道中記』	寛永14年(1637)頃?	岩佐又兵衛 (東京大学史料編纂所)	
『寛永諸家系図伝』	寛永20年(1643)	荒木村常が江戸幕府に提出	荒木村次の子
『福岡荒木家系図』	明暦 2年(1656)	紫野澤菴(1573-1645)が述べたという記録	〃 早世と記載
『遠碧軒記』	延宝 3年(1675)	黒川玄逸著 道祐は字 医師	荒木村重の子
『岩佐家由緒家系図』 重文 『岩佐家譜』	享保16年(1731)	福井藩士馬淵亨安 (MOA美術館)	荒木村重の末子
『寛政重修諸家譜』	文化 9年(1812)	諸家提出系譜を基に江戸幕府が編集	荒木村次の子
群書類従所載 浅羽本「荒木系図」	作成年不明 寛政年間?	同時期の史料に『寛政重修諸家譜』がある。	〃